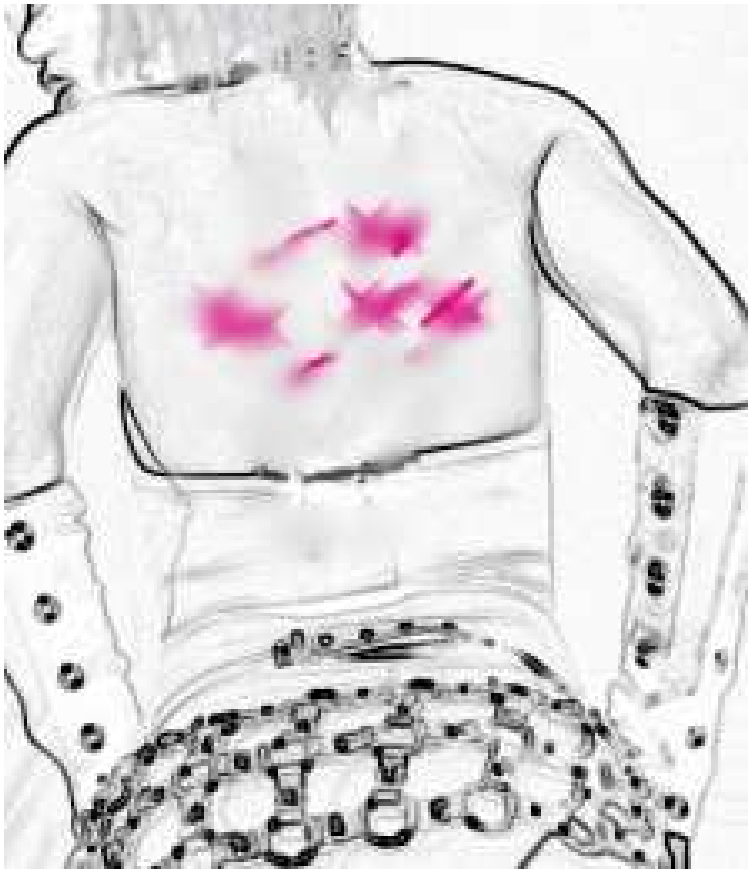
小説『堕ちる』

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

http://unpluggednovel.blog109.fc2.com/

自虐版
罪と罰みたいな



あるいは、

自ら堕ちて

いく生き物

の日記

試読用のPDFです。冒頭部分のみです。

目次

人間を捨てた日……４

公園の汚物処理係……38

奉仕の拡大……62

堕ちきれない自分……82

隣人の奴隷……94

食糞ＯＬの一日……123

辞表を出しました……138

死ぬまで消えない傷……156

落書きタトゥー……168

絶頂感を知らなかった私……171

色狂いとなった一日……191

残酷な野望……207

果てしない輪姦……222

お尻の拡張とリング……234

拷問にもだえる……252

無免許変態獣医……284

束の間の休息……300

屈辱の貸し切り……301

告白の相手……331

買い物をさせられて……348

万引きをしなさい……365

セレブ倶楽部……379

鬼女たちの祝宴……410

宴の果て……443

暴力姦の夜……454

拷問ショー……478

自虐の旅……504

＜書き下ろし特別編＞

豚小屋生活……531

最後の日記……559

オガタの日記……569

　12 月 9 日（土）～12 月 22 日（金）

クリスマスパーティー……625

人間を捨てた日

11 月 22 日（水）

私は、今日まで人間の女として仕事をさせていただいていました。

昔から、私の中には私に命令する人がいて、私はミスをしたり失敗をすると自分を罰してきました。

それがいまでは、すっかり毎日のことになって、計画性も出てきて、かなり前から「今度はああいう目に遭わせ

よう」などと考えるようになっていたのです。

　そして今日。思った通り、私は恥ずかしさをこらえて思い切ってある男性に告白したのですが「そういう気持ちはない」と断られました。

　もし受け入れられていたら、これまで犯したさまざまな罪が一度に許されるはずでした。

　ですが、断られたときは……

失敗した罰は、これまでになく重いものでなければなりません。それは……。

人間であることを放棄すること。

すでに別の罰を自分に課して、私はワンルームマンションを引き払って、六畳一間の安いアパートに移っていました。

殺風景な部屋ですが、必需品である等身大の鏡が２枚、あります。私はそ

の鏡の中に映る女を罰しているのです。

　以前から思っていた通りにしなくてはいけません。
　ＯＬとして身につけていた装身具をすべて取り、化粧もほとんど落としました。

　裸になります。

　過去に告白に失敗したとき、私は自

分にこう命じたのです。

「一生、恥毛をはやしてはいけない」

　剥き出しの醜い陰部からとろりとした液体が流れて太ももの内側を伝っています。

「本当にいやらしいな。だから振られるんだ。もうおまえは女としての値打ちもない。今日からは、念願どおり、公衆便所と名乗ることだ」

そう命じていただき、私はそれほど大きくない乳房の下から下腹部にかけて、太いマジックで「公衆便所」と新しい呼び名を身体に書きました。

二枚の鏡を使うと、ちゃんと読めるように見ることができるので、下手ですが、なんとか書くことができました。「所」の部分は左右の太ももと陰部にまでかかっています。

黒々とした文字に体が犯される感触……。

「その文字が自然に消えるまで、この罰は終わらない」

　赤いマジックにコンドームをかぶせてお尻に押し込みます。

「毎日浣腸せよ。浣腸以外の排泄はしてはいけない」

　社会人になって一人暮らしをして自分にそう命じていました。仕事で些

細なミスばかりしていたからです。

　お尻への罰はしだいに激しくなり、浣腸をしたあとは、ゴミ置き場で拾った、ゴルフボールを二個入れることも命じられていました。
　お尻の穴はだから、それぐらいなんともないのです。

　鏡の中の自分は、こうして、淫乱で汚い女へと成り下がっていったのです。

陰部にはコンドームをかぶせたローションの入った小瓶を押し込みます。

去年、自分で誕生日をお祝いして買ったフェイクファーのコートを着ます。袖も丈もゆったりしていて、男性にも着ていただけるサイズです。暖かく、とても気に入っていますが、今日でそのコートともお別れです。

近くにある公園にはホームレスが３人、住んでいました。以前からその中の一人、色が変色し裾がぼろぼろになっているキルティングのコートを着たおじさんに決めていました。

裸の上にコートを羽織っただけで、夜の公園に行きます。冷たい風が吹いています。今日で終わりなんだ、と思いながらそこに立っていました。どうしようかと思っていると、気持ちが通じたのか、おじさんが小屋から出てき

て、トイレに入りました。男性用の小便器が３つ、誰でも使える少し大きな個室が１つあります。

　小便を終えて戻ってきたおじさんに、とうとう私は声をかけました。

「すいません。このコート、受け取っていただけませんか？」

「え？」

　おじさんはコートに手を伸ばします。私の乳房に当たります。

「いいねえ、暖かそうだね」

「はい。いま、おじさんが着ているコートと交換してください」

「へえ。いいの？」

「よく見てください」

　おじさんを街灯の下へ誘導します。そしてコートを脱ぎました。

「はあ」

　驚いたような声をあげています。

「私は公衆便所と申します。どうか、コートを取り替えてください」

「いいよ」

おじさんは汚れたキルティングを脱いで、私のフェイクファーのコートを羽織りました。

「こりゃいいや」

「もうひとつお願いがあります」

「なんだ」

私はおじさんにお尻を向け、よく見えるようにと突き出し、少し飛び出し

ているコンドームの末端を引っ張り出しました。太いペンを取り出します。

「へえ」

「これで私の背中に、無料奉仕と書いてください」

「むりょうほうし？」

「はい。できるだけ背中いっぱいに」

「おれ、字が下手だしな。わかんねえよ」

「お願いします」

「いいけどさ」

　おじさんは赤のマジックを私の背中に押し当てました。肩胛骨の上あたりからはじまって、最後はお尻の左右にまで。どうやらひらがなで書いたようです。どんな風に書いたのか、私に

は見えませんが、「ありがとうございます」と言いました。

「なんでもいたします。無料で奉仕させてください」

「いいのか。あんた、まだ若いんじゃないの。きれいじゃないか」

「私は公衆便所です。そう思って使っていただきたいのです」

　私はひざまずき、おじさんのズボンを降ろしました。数枚の下着を重ねていて、その下からとても普通の生活では嗅ぐことのない異臭のするおじさんの陰部が出てきました。

　ゴミ箱の中に溜まった魚の骨や乳製品などが発酵したような臭い……。

「じゃ、やってもらおうかな」

　その体が激しく抵抗する臭いを、思い切り肺に吸い込みます。

垢と汗と汁と尿にまみれた包茎の陰部をゆっくりと舌で舐め、やがて大きくなってくると口に含みました。

はじめての、ホンモノの男性を、私は体に受け入れることになりました。

人間便器としての最初の夜は、長く辛いものでした。

おじさんの名前は「ろく」。ろくさんとお呼びすることにしました。

口の中にたっぷりの精を注いでい

ただいたあと、ろくさんのテントに入れていただき、陰部にもタップリと注いでいただきました。

　そして隣に住むかなり高齢のせいさんを紹介していただきました。せいさんはもう硬くはなりませんでしたが少し口の中に出していただきました。

　それだけではもうしわけないので、お尻の穴までしっかりと、大好物のフ

カヒレスープをいただくように、はぐはぐと舌で丁寧に掃除させていただきました。

　自分が汚れていく感覚と、汚いものをきれいにしていく悦び。舌がしびれてきます。

「そんなことしたら、気持ちよくなって、うんこが出ちゃうよ」

「お願いします」

「ダメだよ、汚れちゃうから、ここじゃいやだよ」

　私はせいさんと公園の個室トイレに入りました。
　ステンレスの床に浅い便器が掘られていて水が常に流れています。

　いやだ、絶対に嫌だ。そう体が拒否します。頭の中は大混乱です。これは人の体を舐めるのとはわけが違います。

震えながら、「それでも、しなきゃ」と思うのです。「しなさい」と。

私はそこに裸で仰向けになりました。

背中に便器があたります。冷たいだけではありません。鎖骨ぐらいまで伸びた髪が、水に流されて排水口へと入っていくのがわかります。

せいさんのお尻が顔の上にありま

す。暗くてよく見えませんが、やがて、下痢状の便が少し口に入りました。

　絶対にダメ、ムリ。ありえない……。そんな自分の悲鳴が、小さくなっていくのを感じます。

　それは、味とか臭いとかいうレベルではなく、口の中を強烈に支配する圧倒的な存在でした。

　ほんの少しなのに、もう、私は動くことも、考えることもできなくなっていました。

「いいのかい」

　もう、返事はできません。でも、その直後、大量のガスとともに下痢便をいっぱいくださいました。

「うっ、ぐっ、がぁ」

　私は反射的に避けてしまう自分を縛めたのですが、なにしろ最初なので、どうにもなりません。

一度に浴びせられ、大半は顔にかかってしまい、飲み込めたのはわずかでした。

「お願いです。水を流してください」

顔を便器におしつけて水を流していただきました。

それからせいさんのお尻を改めて舌できれいにさせていただきました。

　こんなことが慣れるものかどうか、わかりませんが、最初のときよりは、体の抵抗も少し和らいだようです。

　もうひとつのテントにいるよねさんは、少し若く、とても小柄な人です。整理整頓が好きで身きれいにしていました。

「ちょうど小便がしたかったんだよ」

　よねさんはテントの外の草むらに

お読みいただきありがとうございました。

これからも、荒縄工房をよろしくお願いいたします。

http://unpluggednovel.blog109.fc2.com/

小説『亜由美』

第一部

好評発売中です。

スカ、グロはありません。